

M H F 魔 人

序章



朝ベッドから起きた時にもものすごく頭が痛かったので病院に行くことにした。
ただ、実を言うと私にとって一日が
朝、昼、夜に分かれているという感覚はほとんどない。

自分でも気づかないうちに眠ってしまっていて気づいていたら目覚めている。
そんなことの繰り返しなのだから。

しいて言えば1時間ごとに昼と夜が入れ替わるそんな世界の住人なのだ。
だから朝起きた時と言っても
それが午前なのか午後なのかはまったくわからないし
あまりの頭痛に自分が生きているかどうかも疑わしい状態だった。

しかし病院はあいにくと診察を行っていたので
まともな時間だったのであろう。
大量のご老人たちに囲まれて待たされること数時間。

「こんなに時間があれば剛種武器コンプリートできちゃうよ……」

ネットゲに、その中でもおそらくトップクラスの面白さを誇る(私が思ってるだけかも)
『MHF』にはまっていた私(キャラクター名『miru』)には
その数時間の待ち時間が永遠にも感じられた。

『MHF』とは『モンスターハンターフロンティアオンライン』の略称で、
仲間を集めて様々なモンスターを狩猟し、その素材を集めて新しい武器や防具を作り
さらに強いモンスターを狩猟しにいくという単純明快なオンラインアクションゲームだ。

この新しい武器を手に入れた時の興奮と強いモンスターを狩猟できた時の喜びが
私をこれまでのゲームではおよそ考えられないほど『MHF』に縛りつけた。

初めて私がゲームをやったのは2歳の頃。
確かゲームボーイアドバンスSP』とかいうハードで、
タイトルは忘れてしまったが
ひげのおじさんがキノコを食べながら横にどんどん移動していくゲームだ。

このときからアクションゲームにのめりこみ
6歳のときにはどんなソフトでも1週間あればカンストしてしまうレベルに
達してしまっていたのは今でもどうかと思う。

すべてのゲームが一瞬で終わってしまうことで妙なむなしさがともない
一切ゲームをやらない日々が続いた時、
そんな暗黒期に出会ったのが『MHF』だ。

オンラインゲームというのはもちろん初めてだったし
取扱説明書なんてほとんどないのと同じだからすべてがわからなかった。
皆がチャットを使って色々交流しているのに自分だけ何もできないことで
世界中でひとりぼっちになったような感覚に陥った。

RPGで言うのならレベル100から
次の日いきなりレベル1に戻ってしまったみたい。

まだ始めたばかりのハンターが集う酒場で何をやればいいのか
まったくわからずうろろしている私に、一番最初に声をかけてくれたハンター様。
今でこそ、その方に教わったことは基礎中の基礎であるとはわかるのですが
当時は本当に勉強させていただきました。

チャットの範囲や武器の作成方法から猟団、狩人祭、ハメのやり方などなど
すべてが初めての体験であった私には神様のように感じられたのだ。

そんなこんなで『MHF』にどっぷりとはまってしまった私には、
たかだか数時間の診察待ち時間なのに
頭痛を我慢してこのまま帰ってやろうと思ったのは
500回以上にものぼったのだった。

よくわからない大きな機械に体全体をスキャンされたあとにさらに待たされること数十分・・・
医師に告げられた言葉は意味のわからない言葉に聞こえた。

「脳に腫瘍ができています。最大で半年、悪くて1カ月くらいかもしれません
ただしあきらめるのはやめましょう。現在の医療は大変進歩しており……………」

そこからの記憶はなく気づいたら自分の家に到着していた。
きっと悪い夢だったのだと自分に言い聞かせようとしたが頭痛がそれを許さなかった。

『MHF』に文字通り命をかけてきた私にはつらすぎる現実。
怒りと悲しみがごちゃまぜとなったこの奇妙な感情。

先がないとわかりながらふたたびPCを起動してしまっている私。
何をやっても数カ月後にはすべてが無駄になるとわかっているのに
やめられない、やめることができない。

ログインしてもフレたちに心配をかけることはできないから
チャットでは普段通りの会話しかできない。

「昨日発表されたハーヴェスト装備ってありゃ廃人は3日くらいでつくっちまうんだろな～」
「ですねw俺は1年くらいの長期計画で行きたいと思います^^miruさんもそうしましょうよw」
「そそ^^ぬけがけ反対～wwww」
「そうですねw、私も長期計画で行きますよ～できる前に引退してるかもしれないけど^^;」
「またまた～このMHFの螺旋からは誰も抜けられないですよ～ww」
「wwww」

涙がとまらなかった……。

もうフレや他の誰かに自分の夢を託すしかないと思った瞬間だった。

このとき私はある一つの決心をした、残された時間は少ない。

それならば私ができなかったことをやった人達、そしてこれからやりとげるであろう人達に話を聞いてみようと。